牛の足に砂金ピカピカ

暑い　暑い　夏の或日　牛引きの長次は、追分の問屋場から、牛の背に荷物を積んでトボ　トボと七まがり坂をおりてきた。

その時　足もとの草むらから突然　バタ　バタ　バターと羽音も高く山鳥が二羽飛びだした。長次は、キモをつぶさんばかりに驚いたが、それよりも牛の方がびっくりして「もー」と一声、手綱を振り切って一目散に山坂道を駆けくだっていった。

長次は「いつも牛仏様の処で、牛仏様を掃除しながらひとやすみすんのーを、知ってっぺえーから、きっとそこら辺で草でも喰ってっぺえー。」と一人ごとをつぶやきながら、額の汗をふきふき七まがりの坂をかけおりた。

あんのじょう牛は、牛仏様の近くの川原で、うまそうに水をのみながら長次の顔を見て、もーもーと鳴いた。

「ほーら、ほーら、ハイー、ハイ」と牛の手綱を取って道まで引きだして見て驚いた。

牛の前足がお天とうさまの光をうけてピカ、ピカとひかっていた。手に取って見ると砂金！まぎれもねえー本物の砂金だ！

これは　てー変だあーとそこらあたりを探すと、牛仏様の近くの、朽ちた大木の根かぶのそばの足跡の穴に、砂金が土砂に混じって五升ほどピカ、ピカと光っていた。

「牛仏様、有難うごぜえやす　有難うごぜえやす　牛仏様」と手を合す長次の目から、大つぶの涙がポタリ　ポタリと地におちた。長次は本当に嬉しかったんだねー。　その後、長次は長沼町の問屋のご主人さまになって一生、幸せに、幸せに暮したそうな。